

「生神」 *A Living God* とハーン

—— 史実と「稲むらの火」との比較から ——

三 成 清 香

目 次

1. はじめに
 - (1) ハーンと再話
 - (2) この物語の特異性—原話としての「生神」—
 - (3) 「生神」から「稲むらの火」へ—作品の役割—
2. 安政の大地震・津波と濱口儀兵衛（梧陵）
3. 「生神」に見るハーンの姿
 - (1) 物語の簡略化と自己犠牲的側面の強調
 - (2) 青年から老人へ
4. おわりに—「稲むらの火」から見えてくるもの—

1. はじめに

(1) ハーンと再話

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、1950年にギリシャで生まれ、日本へ来たのは1890年のことである。1904年に亡くなるまでの14年間を日本で過ごし、様々な業績を残した。『知られぬ日本の面影』*Glimpses of Unfamiliar Japan* (1894)、『怪談』*KWAIDAN* (1904)などの著作はよく知られているところであろう。古き良き日本の姿を美しく書き残した彼の著作に関しては、「日本人の霊の世界に入り込んだ作家¹⁾」と称されるほど現在でも高い注目と評価が与えられている。

特に再話作品への関心は高く、それらが19世紀に外国人の手によって書き直されたものであると認識されないまま受容されている一面すらある。よく知られている例として「雪女」*YUKI-ONNA*がある。遠田勝氏は、ハーンの「雪女」はハーンが口碑伝説に手を入れて小説化したものなのか、それとも、ハーンの「雪女」が日本人に愛されて民間で語られるうちに、各地で口碑伝説化したものなのかという問題について調査し、「雪女の口碑伝説は、その大部分がハーンから出たものであらうと、ほぼ確実に立証できた²⁾」と述べている。すなわち、我々が純粹な日本の古い物語だと思い込んでいるものの中に

は、実はハーンという人物を介しているものもあるのである。こうした点から考えると、最早「原話」・「再話」といった概念すら曖昧になってくる。それほど、ハーンの再話作品は広く深く浸透しているのである。

(2) この物語の特異性—原話としての「生神」—

数ある再話作品の中でも、本稿で扱う「生神」*A Living God*は特別な存在感がある。その理由として、主に二つを挙げることができるだろう。まず、この物語と tsunami という言葉との関わりである。tsunami について、これを世界共通語にしたのは、ハーンであると思われがちであるが、実はこの日本語を初めて世界に伝えたのはエリザ・シドモア女史である。彼女は明治三陸大津波を伝える記事 *The recent earthquake wave on the coast of Japan* (『*National Geographic*』1896年9月号) で初めて「tsunami」を用いたと言われている³⁾。それでは、なぜ tsunami とハーンが関連付けられるかということ、まさに、この「生神」が深くかかわっているのである。「生神」は1896年12月号の *Atlantic Monthly* に掲載され、翌年には『*仏の畑の落穂*』*Gleanings in Buddha-Fields* (1897) に収録され、アメリカおよびイギリスで発行された。一つの物語として、広い地域で長い間読み続けられたことにより、tsunami が人々に浸透していったと言えるのである⁴⁾。このように、多くの人々に tsunami という言葉を、実質的に広め得た作品としての意義は看過できないものであらう。

次に、この物語の変容である。1896年に発生した明治三陸大津波の報道を目にしたハーンは、その悲惨さと災害に対する日本人の姿を発信するため、それよりもはるか昔に和歌山県で起こった安政の大地震・津波(1854)の際の出来事を絡めて「生神」を書いた。そして、それが後に「稲むらの火」へと姿

を変えるのである。すなわち、ハーンが日本の史実に基づいて作り上げたオリジナルの物語が、第三者によって描き直され、日本で広く読まれるようになったのである。こうした意味で、ハーンは日本の古い物語を「再話」し西洋社会へ発信する側から、日本の物語の「原話」を書き残した人物になったともいえるのである。「稲むらの火」について、杉中浩一郎氏は以下のように述べている。

一方、この教材文は、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が有田郡広村（現広川町）の先覚者濱口梧陵（儀兵衛）の業績を踏まえて作品化したものを、県内の若い教師が翻案して児童向きに執筆し、それを文部省が採択して登載したという点で、郷土色があると同時にグローバル性をもっているのである⁵。

このように、描き直された「稲むらの火」は郷土色が強いと同時に、その原話がハーンによって描かれたものであるという点から、グローバル性を含んでいるとみなされ得る。ただし、留意しておかなければならないのは、ハーンの世界には多くの場合、以下のような傾向があることである。

ハーンには、(一) 再話を欧米の読者の世界とはまるで違うめずらしい世界の出来事についての話にするため、なるべく原話の持つ異国的なものを保ち、時には原話にはない要素によってさらにそれを強めて提示する傾向と、(二) 話が欧米の読者に受け入れられるために、必要な場合には欧米の平均的読者の価値観に近づけるように原話を変える傾向という、二つの傾向が見られることだ⁶。

太田雄三氏のこの指摘にあるように、ハーンの世界は異国的な要素の強調と、読者を意識した物語（価値観）の変更が見て取れる。したがって、この作品に含まれるグローバル性は本稿において必ずしも肯定的なものではない。むしろ、ハーンが読み手の価値観に合わせてどのように物語を変更していったのかはニュートラルな視点から読み解くべき箇所であり、それによって失われたものにもまた目をやる必要がある。さらに、(一) にあるように、「生神」

は「極めて日本的な物語」として受け入れられることを目論んで描かれた物語であること、そして「稲むらの火」はそのような作品をもとに描かれた作品であるということは忘れてはならない。だからこそ、この物語が「戦前の」国語教科書に掲載されたと言えるのである⁷。

(3) 「生神」から「稲むらの火」へ—作品の役割—

ここで、改めて「生神」と「稲むらの火」の誕生と変容について概略を述べておこう。前述のとおり、1896年6月15日に三陸地方を襲った明治三陸大津波を機にハーンは「生神」を執筆した。「生神」が「稲むらの火」となるのは、それからしばらく後のことである。「生神」から「稲むらの火」がどのように誕生したのかについては諸説ある。一つ目の説は、上記の通り、「生神」を読んだ若者が感銘を受け、それを教科書用に書き直したというものである。これについては様々な先行研究で言及されているところである。以下は、稲むらの火の館（和歌山県有田郡）で入手できる冊子に記された文である。

それから約四十年後の昭和初期、この「生き神様」を中井常蔵⁸という青年教師が教材用に書き下ろしたのが「稲むらの火」である。湯浅町出身の彼は、梧陵が創立した耐久中学校に入学し、梧陵の築いた大堤防を通学路に利用していたという。

師範学校在学中に英語の教材として「生き神様」と出会い、大変感銘を受けた彼は、教師になってから、いつしか梧陵の思いを子供たちに伝えたいと思っていた。そして、一九三四（昭和九）年、文部省が第四期国定教科書の国語の教材を全国に募集していたので、「稲むらの火」を文部省へ応募したところ、見事に当選して、一九三七（昭和十二）年からの尋常小学第五学年用国語読本に載ることになったのである⁹。

このような流れは、現在でも多く言われているところである。一方、こうした流れに反する説もある。『小泉八雲事典』の「稲むらの火」の項目を見ると、以下のように記されている。

なお府川源一郎に『「稲むらの火」の文化史』

(久山社、一九九九年)があり、中井がハーンの英文を基に「稲むらの火」(あるいは「津波美談」)を書いたように記しているが、おそらく誤りであろう。そうではなくて中井が、それ以前に保科孝一編『大正国語読本(第三修正版)卷二』(育英書院刊、大正十四年)以下に収録された「浜口五兵衛の話」という中等学校用国語教科書の教材を再利用したのが真相であろう。(中略)中井氏は生前、「稲むらの火」の出典についての平川の再三の質問に対し、英文を読んだとは言わず、言を左右にした。それだけに府川氏の一連の調査により、大正末年から昭和初年にかけて「濱口五兵衛の話」や「五兵衛大明神」の話が多くの中等国語読本ないしは高等女学校用国語教科書にすでに出ていたと知って、平川は中井氏の典拠はそこにあったかと感じた次第である¹⁰。

ここでは、「生神」と中井常蔵による「稲むらの火」の間に、別の作品が存在したことが指摘されている。中等学校用に既に作品化されていた「浜口五兵衛の話」を、中井常蔵が初等学校用の教材に書き改めたというのである。ただし、現在でも多くの人が前者のように信じている。すなわち、師範学校在学中のある日、英語の教材として「生神」と出会った湯浅町出身の中井常蔵は、自身が濱口梧陵が創立した耐久中学校に入学し、梧陵の築いた大堤防を通学路に利用していたことから、この作品に感銘を受け教材用に書き下ろしたのだと思っているのだ。しかしこれは考えてみればできすぎた話ではないだろうか。一方、上記の平川祐弘氏の説は、氏が直接中井常蔵へ問いかけたということもあり、信憑性は低くないように思われる。

「生神」が「稲むらの火」へ、どのようにつながっていったのかについては稿を改めて述べることにするが、ここで注目したいのは、その描きなおされた「稲むらの火」が現在でも一定の役割を担い続けているということである。戦前から、戦後に新しい教科書ができるまでの約10年間、「稲むらの火」は多くの子どもたちに読まれていた。戦後、戦前の教育が否定されていく中で、この作品も読本から姿を消すこととなる。しかし、その後完全に忘れ去られてしまったわけではなく、むしろ近年、注目が集ま

ってきている。それは、防災教育における教材としてである。これについて小泉凡氏は次のように述べている。

この作品は、2005年に神戸で開催された国連防災世界会議の際に、子どもたちの防災教材として生かすべきだという議論があり、その後、内閣府の外郭団体として設置されたアジア防災センターがアジア各国のNGOと連携し、津波が起こりやすい地域の言語へ翻訳したテキストを出版し、読み聞かせ活動も行っている。現に、2度目のスマトラ沖地震の際には、その効果が大きかったという。すでに、スペイン語、フランス語のほか、タガログ語、タイ語、マレー語、インドネシア語、ヒンディー語、ベンガル語、シンハラ語、ネパール語などに翻訳されている¹¹。

すなわち、日本の史実をもとに英語で書かれた「生神」は、日本語で描き直された「稲むらの火」へと姿を変え、それが再びさまざまな言語に訳され世界中の防災教育の現場で活用されているのである。こうした流れに加え、2011年3月11日の東日本大震災もまた、この作品の意義をより多くの人に再認識させる契機となった。この作品が防災教育の現場でどのように活用され、その効果がいかなるものであるのか、あるいはどういった点が意義深いのかについては、東聖子「〈授業報告・東日本大震災を考える〉紙芝居『稲むらの火』—江戸末期の津波を描いたヒューマン・ドラマ—」、山本稔「国語教材化の視点(I)、(II)」、水野欽司「防災教育の名作「稲むらの火」由来」などで言及されている。また、近年、「生神」あるいは「稲むらの火」を語る

【表1】「生神」及び「稲むらの火」誕生までの流れ

1854年	安政の大地震・津波
1896年	明治三陸大津波 「生神」 <i>Atlantic Monthly</i> 掲載
1925年	「浜口五兵衛の話」(保科孝一編『大正国語読本(第三修正版)卷二』(育英書院刊))
1934年	文部省が国語読本の教材を募集 「稲むらの火」(原題「津波美談」)が入選
1937年 ～ 1947年	『尋常小学校国語読本』へ掲載

とき、多くの場合、東日本大震災と関連付けて論じられていることが分かる。さらに現在、「稲むらの火」は、様々な科目の教科書に掲載されている¹²。これはこの作品が単に文学的価値があるものだけではなく、私たちが直面している様々な問題に示唆を与えうるものであることを意味している。

本稿では、「稲むらの火」の意義を踏まえつつ、その原話となった「生神」に改めて注目し、この作品から浮かび上がるハーンの姿に迫りたい。具体的には、史実から「生神」へどのような書き換えが行われたかを明らかにし、その後、「生神」から「稲むらの火」へいかに変化していったのかを見ていく。

2. 安政の大地震・津波と濱口儀兵衛（梧陵）

ここでは、「生神」の原話ともいえる出来事、安政の大地震・津波と、主人公のモデルとなった濱口梧陵について略述しよう。濱口梧陵は1820年に現在の和歌山県広川町で生まれ、1853年に儀兵衛と改名した。その翌1854年に安政大地震・津波が起こる。以下は儀兵衛の手記からの抜粋である。

五日七ツ時（午後四時）に至り大震動あり、其の激烈なる事前日の比に非ず。瓦飛び、壁崩れ、塀倒れ、塵烟空を蓋ふ。遙に西南の天を望めば黑白の妖雲片々たるの間、金光を吐き、恰も異類の者飛行するかと疑はる。暫くにして振動静りたれば、直に家族の避難を促し、自ら村内を巡視するの際、西南洋に當りて巨砲の連発するが如き響をなす、数回。依って歩を海濱に進め、沖を望めば、潮勢未だ何等の異変を認めず。（中略）

瞬時にして潮流半身を没し、且沈み且浮び、辛じて一丘陵に漂著し、（中略）八幡境内に退き見れば、幸に難を避けて茲に集る老若男女、今や悲鳴の声を揚げて親を尋ね子を捜し、兄弟相呼び、宛も鼎の沸くが如し、（中略）日全く暮れたり。是に於て松火を焚き（中略）路傍の稲叢に火を放たしむるもの十餘、以て漂流者に其身を寄せ安全を得るの地を表示す、此計空しからず、之に頼りて萬死に一生を得たるもの少なからず¹³。

この記述から、地震が起こったのは午後4時頃で、津波が発生したのは日没後であったことが分かる。儀兵衛は稲むらに火を付け、暗闇で人々に避難所を照らし示した。しかし、史実において重要なのは、儀兵衛が稲むらに火を付けたことではなく、この地震・津波の後、儀兵衛が町の復興に尽力したことであり、その結果、多くの人々が救われたと言えるのである。そしてこの行為こそが、彼を「生神」と呼ぶに至らしめたのである。

家財を失い、肉親から離れ、飢餓と恐怖にとられた村民は、他に移住し、または復興の意気を失ったものが多かった。この様子を見た梧陵は、根本的に救済の方法を考え出す必要性を痛感し、まず家屋五十軒を新築して、極貧者には無料で居住させ、多少の資力あるものには十か年賦をもって貸与し、農具漁具も分配し、商人には応分に資本を融通した。さらに今後の津波に対する防備のため、堅固な防波堤の築造を考え、（中略）このために私財を投じたのである¹⁴。

（下線は筆者）

ここから分かるように、儀兵衛は被災地の救済のためにあらゆる手を尽くした。避難時に用意した米が257俵を超え、築堤に従事した人数は延べ56,736人であることを考えると、彼が稲むらに火をつけたことによって救われた人数（9名¹⁵）とは比べものにならない人々が命をつなぐことができたと言える。これは財の成せる業とも言えるが、単に一時的な慈善事業を行うのではなく、人々に働き口を与えることで、人口流出を食い止め、恒久的な地域の復興につなげたという点に留意すべきであろう。（なお、種痘館の建て直しなど、多くの偉業も残しているが、本論とは直接関係がないため割愛する。）

こうしたことから、地域の人々は儀兵衛を「濱口大明神」として祀ろうとしたが、儀兵衛はこれを許さず叱りつけたと言われている。したがって、彼は実際には「生神」として祀られはしなかった。ただし、人々の中ではこの上ない敬意の念が抱かれていたことは想像に難くない。

3. 「生神」に見るハーンの姿

それでは、こうした史実にもとづいた「生神」はどのような作品なのであろうか。この作品は、三部構成である。まず、第Ⅰ部では、日本人と神（神道）について、また日本人の信仰心やそれにまつわる諸々について、ハーンの詩的な空想を織り交ぜながら記されている。そして、日本独自のそうしたものを英語で正確に伝えるのは難しいものであるとしている。続く第Ⅱ部は、日本社会にはオキテがあり、その中で相互扶助が最も重要なものであると述べられる。そして第Ⅲ部でようやく物語が始まる。この手法はこの作品だけに見られるものではない。物語に入る前段階として、ハーンが最も伝えたいことを述べておき、その具体例として物語を示すスタイルは他の作品にもみられるものである。この構成において、第Ⅲ部が最も重要であることは言うまでもない。ハーンが伝えようとしたこと—この物語の場合は日本人の勇敢さや道徳観—は、「物語」の中に凝縮されることによってはじめて読者の記憶にとどまり続けることになる。それは tsunami という言葉

が物語の中で生命を得たのと同じである。

この作品について、小泉凡氏は「ハーンは作品を通して、津波の際にはとにかくすみやかに高台に避難すること、またその際に高い倫理観と勇気を備えたリーダーが必要であること」を伝えようとしたのではないかと述べている。続けて「『生き神』というタイトルには、生きている人間が神として祠に祀られることさえあり得るという、西洋人には理解の難しい日本人の神観念を説く意図も含まれている¹⁶⁾」としている。まさにハーンは、作品を通してこの二点を伝えようとしたと言えよう。ただし、彼がもっとも伝えなかったのは、前者ではなく後者であっただろうと考えている。第Ⅲ部に入る前段階として長々と述べられた第Ⅰ部、第Ⅱ部がそれを物語っている。

これまでも、史実と「生神」、或いは「生神」と「稲むらの火」がそれぞれ比較されてくることはあったが、その三つが同時に検討されてくることはなかった。そこで、ここからは、史実と「生神」、そして「稲むらの火」の相違点（【表2】参照）に、作家ハーンの姿とその意図を読み取っていく。

【表2】史実、「生き神」、「稲むらの火」の比較

	実話	生き神	稲むらの火
名前	濱口儀兵衛	濱口五兵衛	左に同じ
年齢	34歳	老人	左に同じ
濱口家の住居	村の集落の中で低地	村から少し離れた高台	左に同じ
津波が発生した時期	1854年12月23日(冬)	秋	左に同じ
地震の揺れ	激震	長くゆったりとした揺れ方と、うなりのような地鳴り	左に同じ
稲むらに火をつけた理由	暗闇の中を逃げ回っている人に、早く安全な場所を知らせるため	村人に津波襲来を知らせるため	左に同じ
稲むら	脱穀が済んだ後の藁むら	取り入れたばかりの脱穀前の稲束の山。	左に同じ
村の人口	1324人(地震・津波での死者36名)	400人(死者の記述なし)	左に同じ
火をつけた後の主人公について	財産で人々を救い続ける。	村で一番貧しいレベルになった。	明記なし
「生神」として祀られたかどうか	固辞	祠に祀られた。(第Ⅰ部)	記載なし
孫の存在	無し	孫に松明を持ってこさせ、五兵衛が火をつける。この行為を見た孫は「おじいさんは字狂った」と泣き叫ぶが全てを理解した後、許しを請う。	無し

(1) 物語の簡略化と自己犠牲的側面の強調

まず、物語の構成の変化に注目したい。「生神」の特徴の一つに、祭で浮かれている人々が大惨事(災害)に巻き込まれていくというコントラストがある。あえて美しい(楽しい)場面から物語を始めることで、その後のおどろおどろしさ(悲惨さ)を強調するというこの手法は、この作品だけでなく、『怪談』のいくつかの作品にも用いられている。一方、「稲むらの火」では、「これは、たゞごとではない。」という五兵衛の台詞から始まる。既に地震が起こり、まさにこれから津波が起ころうとしている緊迫した場面である。祭の支度に気を取られている人々の描写は、五兵衛の焦る気持ちを引き立てている。

また、史実において、津波が起こったあと、人々は逃げまどい命からがら火を目指した。「稲むらの火」では、津波が起こることを知らない人々が、丘の上で燃え広がる火を見て、当然のようにその火を消すために五兵衛の家が集まってくる。

このような構成の変更点には、想定された読み手の違いが深く関わっている。ハーンの「生神」は西洋人読者を想定して書かれたが、「稲むらの火」の読者は小学生である。そのために、より明快で単純な描写が必要となり、作品の長さも限りなく短縮されている¹⁷。五兵衛の台詞から始まる「稲むらの火」はこうした点でより単純明快である。もちろん、「生神」の第Ⅰ部や第Ⅱ部には全く触れられていない。「生神」では言葉の選び方にも物語の長さにも制限がないため、人々が秋の実りを喜ぶ場面の描写もより詳細に描かれているのだ。

また「生神」では、なぜ津波が起きてもないのに人々が火に集まってきたのかについて、予め第Ⅱ部で「相互扶助の重要性」を説いている。これは、「生神」を通してハーンが伝えたかったことが、津波のおそろしさではなく、そうした災害を生き抜く日本人の姿だったことを意味する。前述のとおり、この物語は第Ⅰ部、第Ⅱ部でハーンが述べたことを具体化した一例なのである。一方、「稲むらの火」ではそうしたことには一切触れていない。それは、相互扶助の重要性が子どもたちが既に身につけているべき考え方であり、同時にこの物語を読みながら自ずと気がつくべきものでもあるからだ。

さらに注目すべきは、ハーンの多くの再話作品に見られる自己犠牲的側面の強調が、例に漏れずこの作品にも見て取れることだ。史実では、儀兵衛が脱穀済の藁に火をつけて避難所を照らしたのだが、「生神」では脱穀前の稲に火をつけたことになっており、「稲むらの火」もそれにならっている。そして、その結果、金持ちであった五兵衛が村で一番貧しいレベルになってしまう。自分の利益を捨て人々の命を救う五兵衛の勇気と倫理観は人々を感服させ、豊かさや貧しさとは無関係に彼を尊敬させたのである。そして、人々は五兵衛を生神として祀ることになる。

しかし、こうした変更点は実際の儀兵衛の功績を失わせてしまっていることを見逃してはならない。前述のとおり、儀兵衛は稲むらに火をつけたことより、復興支援に私財を投じて大きく貢献した。単に人々を食いつながせただけでなく、仕事を与えることにより村の人口流出をも防ぐとともに、その後の津波に備え堤防まで完成させた。さらに、「濱口大明神」として祠を建立しようとした人々に対し、「私は決して神や仏になりたいとは思わない。(中略)祠などをこしらえて祀る計画などしている事は、お上に対して恐れ多いことであり、そのようなことをするならこれからは世話はできない¹⁸」と言い諭し、その計画を中止させたという点も、書き直してしまったがために、儀兵衛の謙虚で高潔な人柄は失われてしまっている。

ここで、再び想定された読者層に目を向けると、太田雄三氏の「(二) 話が欧米の読者に受け入れられるために、必要な場合には欧米の平均的読者の価値観に近づけるように原話を変える傾向」が思い浮かんでくる。この物語は、自己を犠牲にすることで多くの人の命を救った五兵衛という人物の英雄談であり、英雄は英雄として祀る方が読者にとっては分かりやすい。ここで、「お上に対して恐れ多い」などということを持ち出すと、物語が複雑化してしまうのである。あるいは「稲むらの火」のようにその後の五兵衛について記述しないという選択肢も考え得る。人々がひざまずき、この上ない敬意を払ったということで物語を終わらせることもできたはずである。このように考えた時、再び太田雄三氏の「(一) 再話を欧米の読者の世界とはまるで違うめずらしい世界の出来事についての話にするため、なるべく原話の持つ異国的なものを保ち、時には原話に

はない要素によってさらにそれを強めて提示する傾向」を思い出さずにはいられない。すなわち、19世紀を生きた西洋人読者に対し、その社会ではおよそ考えられない行動として「生きている人物を神として祀る」という行為があるのである。問題は、ハーンがこの物語をあたかもノンフィクションかのように記したことである。2005年1月18日付の新聞には、『『稲むらの火』海外でも有名?』というタイトルで次のような記事が掲載されている。

「『稲むらの火』という話は本当ですか」小泉首相は七日の閣僚懇談会で、インドネシア・スマトラ島沖地震の被災国支援緊急首脳会議の際、シンガポールのリー・シェンロン首相から、こんな問いかけを受けたことを披露した。(中略) 小泉八雲によって海外にも紹介された。小泉首相は、最近国内でもあまり知られていない話を外国首相が知っていたことに感心した様子だった¹⁹。

ハーンの美しい文体で描かれた作品は、時にこのような弊害をもたらしている。ハーンは再話作品にあくまでも彼の理想的な日本を描き続けた。そして、その幻想的で異国的かつ美しい世界観は、それが人々を惹きつけば惹きつけるほど、大きな誤解へとつながっていく。こうした描き方は、したがって、事実の歪曲であるという批判につながってしまう部分であろう。

(2) 青年から老人へ

内容において、史実と対比した際に容易に気がつく変更点は、主人公の年齢であろう。実際に稲むらに火をつけたのは34歳の若者であったのだが、「生神」では孫を持つ老人となっている。この変更点からは、日本の老人たちから古き良き日本の精神を学び続けたハーンの姿が浮かび上がってくる。ここからは、松江時代、熊本時代にハーンがどのような人物に出会ったのかについて見ていこう。

まずは、家族の存在である。ハーンは妻セツの実母や養父母、そして養祖父に対し生活の面倒を見続けた。彼は松江から熊本、神戸、東京へと移り住むが、熊本時代は養祖父稲垣万右衛門、養父母稲垣金十郎、トミも呼び寄せ生活を共にしていた。その後、

万右衛門は松江へ戻るが、金十郎とトミは神戸時代、東京時代も同居していた。ハーンは日本に絶望した熊本時代も、日本から逃避した神戸時代も、晩年を過ごした東京時代も、常に没落士族の家族を伴って移動していたのである。セツが物語好きであったことが後にハーンの再話活動に生かされたというのはよく知られているところであるが、セツばかりでなく、小泉・稲垣両家の人々もまた、話の宝庫であった²⁰。とりわけ、万右衛門は幕末に生きた松江の侍であり、「小泉八雲」の命名者でもある。ハーン作品には、万右衛門や金十郎が登場し、いずれの場合も善人として描かれている。ハーンの日本滞在において、妻セツの重要性は様々などころで言われているところであるが、彼女ばかりでなく、万右衛門、金十郎、トミ、そしてセツの実母チェもまた、ハーンに日本の姿を示し続けたといえよう。ハーンのいう〈本当の日本²¹〉とは、家族という空間から構築されたものだと言っても過言ではない。ハーンは家庭の中で大黒柱として常に中心に置かれていながらも、複数の年寄りたちから学び続けていた。

松江時代での出会いの中で注目すべきは家族だけではない。荒川亀斎(重之輔)もまた、非常に重要な人物である。彼は松江の彫刻家で、ハーンが散歩の途中で見つけた石地藏の作者である。ハーンは「英語教師の日記から」で荒川亀斎について次のように述べている。

わたくしはしかし、この松江にも、げんに生きている老美術家で、左甚五郎以上にふしぎな猫を作る人があると、ひそかに信じている。その一人に、荒川重之輔という人がある。荒川氏は、天保時代に出雲の大名のために、かずかずの珍しい品をつくった人で、わたくしは学校の同僚を通じて、この人に面識をうることができた。ある晩、荒川氏は、わたくしに見せたいと言って、たいへん珍しい物を袖に入れて、持って来られた。それは人形であった²²。

ここでの人形とは、「気楽坊」を模した人形のことである。ハーンはこれを大いに気に入り、その後深い交流が続く。『西田千太郎日記』には、荒川と西田がハーンの家を招かれ、美術について大いに話をしたこと、そして上記の人形についても「荒川氏、

ヘルン氏ノ為メニ氣樂翁（寛永中後水尾上皇ノ作ラセ玉ヒシモノヲ天明中模造セシ土偶）ヲ模造シテ贈ラント欲ストテ、該土偶ヲヘルン氏方ニ持参ス」と記されている²³。セツも、ハーンが「貧しい天才」を尊敬していたことを振り返っている²⁴。40歳のハーンにとって、63歳の「老美術家」との交流は貴重なものであったに違いない。二人はハーンが松江を去った後も交際を続け、荒川がシカゴ博覧会に「稲田媛像」を出品するときにも協力したほどである²⁵。

ハーンの松江時代に目を向けると、比較的良好な人間関係を築いており、それは老人とばかりではない。例えば、10歳ほど年上の籠手田安定知事に対しても「この人なら、生涯好きになれるような気がした」とか「仏陀の慈顔というのが、まさにこれだ」などと述べている²⁶。その他にも、第八十一代出雲国造・出雲大社宮司の千家尊紀に対しても好意を抱いていたし、勤務先では西田千太郎をはじめ複数の教員や教え子たちとも親しくしていた。しかし、とりわけ古い日本を示し続けた人々、日本の美しさを示した人物たちが彼に日本の神髄を見せたのだと考えられる。

一方、絶望の時期、あるいは幻想から覚めた時期と言われる熊本時代にも、ハーンは素晴らしい出会いをしている。その一人が秋月胤永である。彼について、ハーンは次のように描写している。

この学校の漢文の老先生で、みんなからひとしく尊敬されている人がある。この人の、若い生徒たちにおよぼしている感化というものは、これはじつに大きいものがある。この人がひとこといえば、どんな怒りの爆発でもしずめることができるし、この人がにっこり笑えば、どんなのんき坊の法器晚成先生でも、うかうかしてはいられなくなる。それはつまり、この老先生が、ひと時代まえの、武士生活における剛毅、誠実、高潔の精神——いわゆる昔の日本魂の理想を、青年層にたいして、みずから身をもって体現しているからなのである。（中略）

若いころ、峻厳をもって鳴らした戦場の古強者が、年老いて温和恰然となったものほど、人の心をふかくひきつけるものはなかるう。（中略）

そんなぐあいでは、秋月氏はしだいに齢を加え、高齢となり、だんだん神様のような風貌を呈してきた。（中略）

やがて老先生は、神さまがこの世にあらわれてまた消えてゆくように、にこにこしながら、帰って行かれた。——いっさいのものを洗い清めて²⁷。

この部分だけでも秋月胤永に対するハーンの思いが如実に見て取れる。また、この文章が「九州の学生とともに」の締めくくりとして書かれていることにも注目したい。ハーンは松江中学の純朴な生徒たちとは異なる気質の学生たちに厚い壁を感じていた。それだけでなく、同僚たちとの人間関係にも悩み、チェンバレン宛の書簡には学校や日本批判が記されるようになる。「九州の学生とともに」についても、ハーンが九州の様々なことに絶望している様子がうかがい知れる文章が続いているため、かえってこの秋月胤永との出会いの貴さが強調されている。秋月胤永に対しては、単なる尊敬の念というよりも、ある種神格化に近いほどの畏敬の念と憧れを抱いていたという方が妥当であろう。

ここまで見てきたように、ハーンは多くの老人に〈本当の日本〉あるいは〈永遠の日本²⁸〉を見続けた。「生神」を執筆するより前のこうした出会い、そして、松江時代や熊本時代に知り得た孝の精神は、この物語の主人公を老人にさせる動機として十分であったに違いない。

以下は、なぜ祖父が稲むらに火をつけたのか分からなかった孫と、燃え広がる火が何を意味するのか分からないまま集まってきた人々が、最後にすべてを悟る場面である。

小さな孫の忠が、おじいさんの側へ駆け寄ってきた。忠はおじいさんの手にすがりつくと、さっきはたわけを言ってすみませんといって、あやまった。村の連中は、やっとその時、自分たちが生き残ることのできたわけを悟って、はじめて目がさめた。そして、自分たちを救ってくれた、このひたむきな、おのれを捨てた老人の先見の明にはじめて心を打たれたのである。組頭たちが打ちそろって、浜口五兵衛の前に土下座をつくると、そこに居合わす一同もそれにな

らって、われもかれもいっせいに土下座をした。老人はそのとき、ほろりと涙を落とした。さすがにうれしかったのである。それともうひとつは、年をとってからだの衰えた自分としては、精魂をつくした働きだったからである²⁹。

この後半の部分は、五兵衛が老人でなければ描けない場面であろう。そもそも、津波を真っ先に察知したのは、「浜口の年老いた鋭い眼」であり、咄嗟の判断を可能にしたのはやはり、五兵衛の祖父から聞かされた話であり、またその海岸に伝わる歴史であった。

史実では、津波が起こってしまった後に、避難所の場所を知らせるために火を焚いたのであり、儀兵衛は何かを予知し行動したわけではない。前述のとおり、その火によって直接的に救われたのは9名ほどである。しかし、「生神」においては、五兵衛の判断により、400名もの命が救われたことになっている。これは、尋常ではない存在しかなし得ないことである。この作品を史実に基づいたフィクションとして完成させるとき、彼はそれまでに会った日本の老人たちの姿を投影したのだらうと考えられるのである。

4. おわりに

—「稲むらの火」から見えてくるもの—

「生神」が史実と多くの点で異なっていること—自己犠牲的側面が強調されたり、主人公の年齢が引き上げられたりしていること—をどのように考えればよいだろうか。この問題は、何もこの作品に限ったことではない。「勇子—一つの追憶—」*YOUKO: A REMINISCENCE* や「和解」*The Reconciliation* などを考えるときも同様に、根底にはいつも同じ問題が横たわっている。そして、これについて考えるとき、ハーンが来日前に記した書簡が大きな手がかりとなる。

親愛なるパットン氏へ

日本ほど人がよく歩いて調べた国について本を書こうと考えると、まるきり新しいことを発見することは望めません—慎重に考えても同じだと思います。できるかぎり全く新しい方法

で物事を考えてみることができるだけでしょう。私はこれまでの本に、能力の許すかぎり「いのちと味わい」を注ぎ込むのです。旅行家であれ学者であれ、その作者たちの報告や説明よりもっと生き生きした印象を与えるのです。(中略)

各章の実際の表題は、およそロマンティックなものとし—おそらくは日本語にします。エッセイ形式のものは本当に全く考えていません。主題はもっぱらそれに関係した個人的体験に基づいて考えることにし、平凡な物語に類したものは注意深く避けます。狙いを考え抜き、読者の心に日本で「生活している」生き生きした印象を与えるのです。—単なる観察者ではなく、普通の人々の日常生活に参加し、「彼らの考え方で考える」感じをもってほしいのです。可能なときには、短編小説のように面白い物語にしたいのです。

また滞在の後期に、日本人の感情を描写した中編小説も用意したいと考えています。以上が、本のプランについて、現在、最善を尽くして述べ得るところです。敬具³⁰

(下線は筆者)

これは来日前にハーンが友人パットンへ宛てた書簡である。ここから分かるのは、彼が来日前から極めて入念に執筆活動について計画を立てていたことである。注目したいのは、ハーンの日本への対し方である。それまでの外国人が、日本を「未開の地」と見なしていたのに対し、ハーンにとっての日本はすでに多くの外国人によって踏み均された場所であり、後発者としての意義は、全く新しい方法で、日本という、ある意味ありふれた題材と向き合うということであった。そして、面白い短編小説や中編小説で、それまでの本に描かれることになかった「いのち」と「味わい」を表そうとしていたのである。

そして、この計画は14年という年月の中で達成されていく。彼は「単なる観察者」ではなく、小泉八雲として小泉家の一員となった。そして、彼の物語を読んだ人々は、日本の「普通の人々の日常生活」に入り込み、日本人の「考え方」を垣間見ることになる。更に彼の作品は、「報告や説明」（「生神」の場合は第I部・第二部）を超え、「短編小説のよう

に面白い物語」や「日本人の感情を描写した中編小説」の中でより「生き生きした印象」を与えている。重要なのは、読み手である私たちがハーンの「考え抜」かれた「狙い」の中に留まっていはいけないということである。彼の鮮やかな文体は、あたかもそれが現実の日本社会であったかのような幻想を抱かせる。そして、そのような美しい姿でありたいという思いも相まって、現実から目を背けてしまうことも少なくない。しかし、ハーンによって描かれた「永遠の日本」の中にいる限り、その外側にある現実の魅力には気づくことはできない。ハーンの再話作品のおもしろさは、現実の日本社会に目を向け、ハーンという人物と彼を取り囲んだ世界に目を向け比較することで始めて浮かび上がってくるものなのである。

参考文献

- 池田雅之『ラフカディオ・ハーンの日本』（角川選書、2009）
- 池橋達夫「荒川重之輔」『小泉八雲事典』（恒文社、2000）
- 太田雄三『ラフカディオ・ハーン—虚像と実像』（岩波書店、1994）
- 小泉セツ「思い出の記」『小泉八雲』（恒文社、1989）
- 小泉凡「小泉八雲(Lafcadio Hearn)を現代に生かす」『関西大学東西学術研究所紀要 46号』（関西大学東西学術研究所、2013）
- 小泉八雲「生神」小泉八雲著、平井呈一訳『仏の畑の落穂他』（恒文社、1986）
- 小泉八雲「英語教師の日記から」小泉八雲著、平井呈一訳『日本警見記〈下〉』（恒文社、2009）
- 小泉八雲「九州の学生とともに」小泉八雲著、平井呈一訳『東の国から・心』（恒文社、2009）
- 白岩昌和「明治三陸大津波を伝えた外国人記者と作家の想い」
- 杉中浩一郎「国語教材『稲むらの火』をめぐって」（『和歌山県教育史研究 1』、『和歌山県教育史』編纂委員会編）
- 遠田勝『転生する物語—小泉八雲「怪談」の世界』（新曜社、2011）
- エドワード・ラロク・ティンカー著、木村勝造訳『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』（ミネルヴァ書房、2004）
- 西田千太郎『西田千太郎日記』（報光社、1976）
- 長谷川洋二『八雲の妻—小泉セツの生涯』（今井書店、2014）
- 久松宏二「国語科教材としての八雲の作品」（『国文学解釈と鑑賞』1991年11月号）

- 平川祐弘、牧野陽子『講座 小泉八雲〈1〉ハーンの人と周辺』（新曜社、2009）
- 山本稔「国語教材化の視点（I）—稲むらの火は消えず—」『滋賀大國文 35号』（滋賀大学、1997）
- 和歌山県広川町『稲むら燃ゆ——海嘯と闘った男・浜口梧陵の軌跡』（ぎょうせい、1998）
- 『濱口梧陵小傳』（広川町文化財保護審議委員会・広川町教育委員会、2005）
- 「稲村の火 海外でも有名？ 首相が逸話披露」『読売新聞 東京朝刊』（2005年1月18日付）

注

- 1 平川祐弘「序」『講座 小泉八雲〈1〉ハーンの人と周辺』（新曜社、2009）5頁。
- 2 遠田勝『転生する物語—小泉八雲「怪談」の世界』（新曜社、2011）22頁。
- 3 白岩昌和「明治三陸大津波を伝えた外国人記者と作家の想い」91頁。
- 4 白岩昌和氏はこれについて、上記の論文の中で「多くの日本人は『津波』という日本語を初めて「tsunami」として世界に伝えたのがラフカディオ・ハーン（小泉八雲）と認識しているようだ。たしかに、『オックスフォード英語辞典』には、以下のような補足が「tsunami」の説明として記されている」とし、以下の内容を記している。「1897 L.Hearn Gleanings in Buddha-Fields i.24' Tsunami! Shrieked the people; and then all shrieks and all sounds and all power to hear sounds were annihilated by a nameless shock...as the colossal swell smote the shore with a weight that sent a shudder through the hills.」ただし、『オックスフォード英英辞典』（オックスフォード大学出版局、2004）や『オックスフォード現代英英辞典』（オックスフォード大学出版局、2005）、『オックスフォードワードパワー英英辞典』（オックスフォード大学出版局、2006）などにはこのような記載は見つからなかった。
- 5 杉中浩一郎「国語教材『稲むらの火』をめぐって」（『和歌山県教育史研究 1』、『和歌山県教育史』編纂委員会編）78頁。
- 6 太田雄三『ラフカディオ・ハーン—虚像と実像』（岩波書店、1994）172頁。
- 7 久松宏二氏は、戦前の中学校の国語教科書に採用されたハーンの記事のうち、怪談は皆無であったが、戦後の国語教科書になると逆に約半分が怪談となっていることを指摘している。久松宏二「国語科教材としての八雲の作品」（『国文学 解釈と鑑賞』1991年11月号）
- 8 明治40年和歌山県有田郡生まれ。昭和7年に三ツ橋から中井に改姓。
- 9 和歌山県広川町『稲むら燃ゆ——海嘯と闘った男・浜口梧陵の軌跡』（ぎょうせい、1998）9頁。

- 10 平川祐弘「稲むらの火」『小泉八雲事典』（恒文社、2000）51頁。
- 11 小泉凡「小泉八雲(Lafcadio Hearn)を現代に生かす」『関西大学東西学術研究所紀要46号』（関西大学東西学術研究所、2013）231-232頁。
- 12 光村図書出版『国語5年』には、河田恵昭「百年後のふるさとを守る」が掲載されている。また「災害に強い地域にするために努力した人」日本文教出版『小学社会3・4年（下）』、東京書籍『新しい社会5年（下）』、啓林館『わくわく理科6』などからも史実および「稲むらの火」を学ぶことができる。
- 13 『濱口梧陵小傳』（広川町文化財保護審議委員会・広川町教育委員会、2005）24-25頁。
- 14 同上、36-37頁。
- 15 「生き神さま『濱口大明神』」『義勇奉公の章でたどる濱口梧陵の生涯』（広川町教育委員会、2013）32頁。
- 16 小泉凡、前掲（註11）231頁。
- 17 山本稔氏によると、「生神」の全文の総字数が原稿用紙16枚分であるのに対し、「稲むらの火」はわずか3枚余分にまで短縮されている。山本稔「国語教材化の視点（I）—稲むらの火は消えず—」『滋賀大國文35号』（滋賀大学、1997）51頁。
- 18 前掲（註15）36頁。
- 19 「稲むらの火 海外でも有名？ 首相が逸話披露」『読売新聞 東京朝刊』（2005年1月18日付）。
- 20 小泉セツや小泉家、稲垣家については長谷川洋二『八雲の妻—小泉セツの生涯』（今井書店、2014）に詳しい。
- 21 「思い出の記」には、ハーンがセツに「私この小泉八雲、日本人よりも本当の日本を愛するです」と話したことが記されている。小泉セツ「思い出の記」『小泉八雲』（恒文社、1989）32頁。
- 22 小泉八雲「英語教師の日記から」小泉八雲著、平井呈一訳『日本瞥見記〈下〉』（恒文社、2009）156頁。
- 23 西田千太郎『西田千太郎日記』（報光社、1976）79-81頁。
- 24 小泉セツ、前掲（註21）30頁。
- 25 池橋達夫「荒川重之輔」『小泉八雲事典』（恒文社、2000）26頁。
- 26 小泉八雲、前掲（註22）115-116頁。
- 27 小泉八雲「九州の学生とともに」小泉八雲著、平井呈一訳『東の国から・心』（恒文社、2009）73-77頁。
- 28 池田雅之氏は、鎌倉や松江、出雲に代表される〈永遠の日本〉のイメージは、彼の中で来日14年を経た最晩年になっても変化をきたすことはなかったと述べている。池田雅之『ラフカディオ・ハーンの日本』（角川選書、2009）44頁。
- 29 小泉八雲「生神」小泉八雲著、平井呈一訳『仏の畑の落穂他』（恒文社、1986）25-26頁。
- 30 エドワード・ラロク・ティンカー著、木村勝造訳『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』（ミネルヴァ書房、2004）、294頁。